劇評

バック・トゥ・バック・シアター
演出：ブルース・グラッドウィン［オーストラリア］
『ガネーシャ VS. 第三帝国』

観客を決して受身に落ち着かせることを許さない点で傑出した作品である。　演劇の全てを知っていると思う演劇愛好家にこそ必要な目の覚めるような特効薬である。

Ben Brantley, The New York Times（アメリカ）

バック・トウ・バック・シアターは“特別”扱いとは無縁である。いやむしろ彼らの行き過ぎる正直さは、ひいきできなくなるほどである。一方で、彼らの真の技術力を見せ付ける息を呑むような美しい瞬間も彼らの作品の特徴である。私が忘れられない場面がある。あり得ないほどの辛らつさと奇妙さ。例えば、ビジネススーツに身をつつむガネーシャが、おどけた毛糸の衣裳を着けたサイモン扮するヒトラーの前に立つ場面。もしくは、ヒンドゥー教の神による召還の場面で、星空が描かれたカーテンが背景に掲げられ、日の出のようなまぶしい光が現われるとき。私は今までこのような作品を観たことがない。まさに、バック・トゥ・バック・シアターだけが作れる作品である。私たちにとって、彼らは最も重要なインディペンデント・シアターカンパニーの一つである。

Alison Croggon, Theatrenotes（オーストラリア）

勇敢で、大胆で、知的で、熟慮された舞台。・・・文化的盗用について、想像する者、そして物語る者の権利と責任にまつわる議論を呼び起こした点で圧倒的な成功である。

Cameron Woodhead, The Age（オーストラリア）